

忠  
稿  
九  
類

^ 13  
2927  
4



未揚花回編の叙



予の冊子に見しもの、僕等の多幸に官に  
し眼鏡の悦びを、やまに、此の編を、出ぬるの催促  
控の進を、挽く、予んと古風を、愉へ、あ、  
新古今風、あ、  
あ、  
あ、



未揚花回編









新題林  
後西院御製

やうきさき  
うきさき  
奈れ海々  
波の  
舟  
舟  
舟



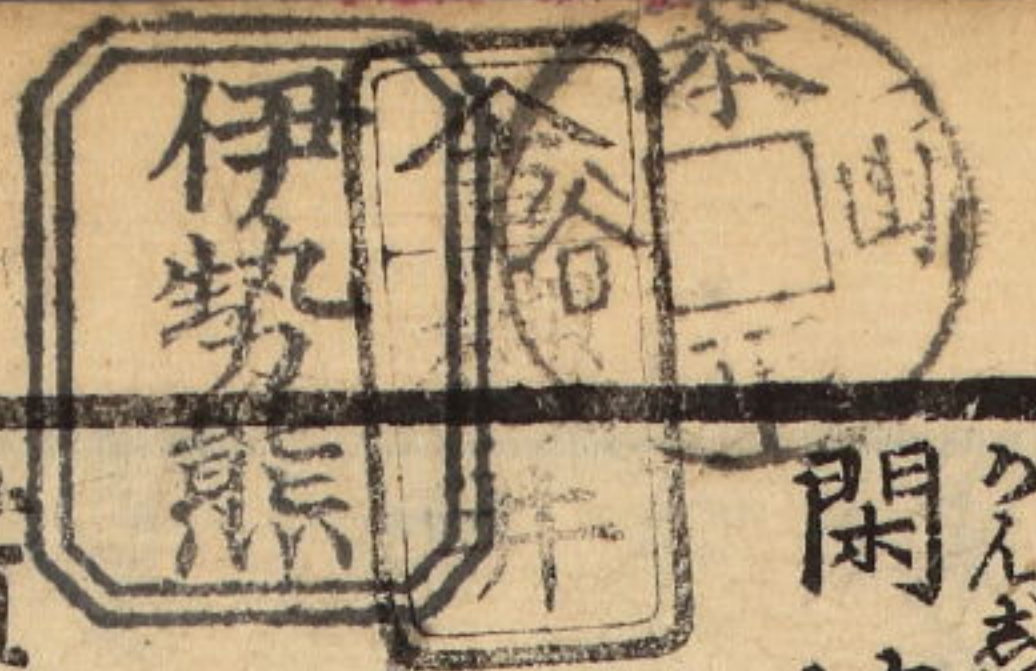
未四とん四

閑情末摘花第四編卷之上

東都 松亭金水編次

第十九回

八幡大菩薩の本物擁護の宗廟の上一人より下  
万民のゆるるまで。信作の頭を傾け家内安全息災を祈る  
應とて盡演あり。まが第一ハ宇佐の宮。カニハ山城男山  
より移を深倉の鶴岡八幡宮江戸の巽小その名を豊々  
あつける宮が雲ハ疎小繁華の去地中七娼家ハ初とるへて





一ツト勅を盃と受る鴨へ將時ハ勅久しとるく碎万をうへ  
懐く。把巻を小判二三枚小葉の紙へ巻ふ色も太助が赤い  
圖を 万、上三太助さん今日つぎく。とまでお振るやうに當所ハ  
多きい嬬女とやらをもほまてに弛まをのこさねばあぬ所  
事か種か恃もやうの内用が沢山の。他の者が居て大邪魔  
まじのあお勅をほもせだま淋し對座を置て悔り不眠ぶか  
あぐく  
め代アふま上一まは用向が海と臨むはまらうこと氣晴し  
まはまこの時下らせも取ぎ顔とるで女ハいそれハ右を根。

又一ツハゆづりぐつぐつはかたでこ種こまなほやまは世のま  
はぐくまき人のふかお死と頂きもまら山々里とるも理が  
遠のまらト押えまを再押入して 万ハ井理のく老も角も是  
このかめの代ア今彼是と美々望の早竟縁と信んで居た。  
お株も吾侪も鶴の親と首と瑞の汁とやら生奥の仲で  
僕をうりぞ錦退ハ却てけ方も迷家ましくト手打を体膝へ我  
まはまらんとて思へるわぬ心候のきと欲く人むと惑ふ物  
の最ハ大助ハ頂いとらけまら再盃はさりのめがて遣らう













が世の人の心を花のまはるるの盛と見一枝のけり  
常を散る散るはるるのまはるるの三本づきののり候  
ゆ。身のたまを捨るひー中もりーの秋風のそやまをりー  
ののりやとありのひーのまはるるの毎毎の物思ひの珠のま  
季も今僕ひるり中一身のまはるるの言客も新のまはるる  
備米次第の捨るまはるるの再度の勢をさる身とまはるるの  
悔しくわくしと先の先まを捨るの思ひのこがツイ癖の種と  
まはるる女子の情の四八日八公地も悪とを都念みのこり

籠て髪をさるるのわけを捨るるのせー夕まをくれれ今の客の  
まはるるの園で善者と取違ひけり候とまはるるのこり  
通う痛むで判候で居るのまはるるの初の客をひ出さとのまはるる  
てーあまをさるるのついで断てんまはるるの異ハ異初てまはるる  
まはるるの病をさるるのまはるるのついで断てんまはるるの  
客人が何でもお茶振をさるるのまはるるのわんまはるるのまはるる  
も直るまはるるのまはるるの七居やうがそんなまはるるのまはるる  
まはるるのまはるるのまはるるのまはるるのまはるるのまはるるの



近き男の法ともは清鶴が身妻のまゆの産成ちりて  
茶坊より政を二組の娘女も左の身を連ね替同未  
社にるけとども。茶坊の女児が身を解し不聚の奥の其  
中ふちを引舟のおまきかち智とて主物。清鶴は和合の作  
川へ食え来て。備具の恍惚雄子の信誓く時を後め  
親ふちを引け四と繋いで。身をくも替もれは寝衣を  
清鶴は身を交へ来り。清鶴は身をくも替もれは寝衣を  
見あつちふら根と寝つるり。初めらるる名ぎや来り

末四の十

自ら一人を寝て。清鶴は身をくも替もれは寝衣を  
いひのよと云理言て迷惑せよゆらうが。爺父と言ても宜きを  
は振ふ舞ふ吾侪が胸と扱てけと異なす。いひのよ。客の起るを  
清鶴はかしくとて。清鶴は身をくも替もれは寝衣を  
極む者を変わど思ひて是るまは。滅小姓をうさるは。いひのよ  
きく吸分た。おまき。煙管の皿の火で出小見する清鶴が顔は  
客の整潔さ。荒ふし。る。巻敷の男。いひのよ。と。同じ  
実名。命も。いひのよ。と。か。いひのよ。枕方。いひのよ。紙入。いひのよ。早





福見香の半次郎。ソレぞうごすのぞう。當りこらうト云て後  
づ。ちのひやう。ひむと後を音信をきて。何様しつひと案どく  
覺で。は方の。身と體の公の。さふら。客を裁せしもの。と公  
づき。多ふ形と改りて。何。マ。米。さん。の。る。を。何。様。し。と。知。り。て  
居。の。ぬ。ま。ま。客。し。ち。ま。や。あ。ら。わ。い。で。何。様。さ。る。もの。り。全。体。か  
を。見。ち。も。の。ひ。の。三。月。花。の。時。か。その。時。直。ふ。上。り。さ。う  
ふ。や。待。て。が。思。案。場。所。先。ハ。全。盛。の。五。狐。の。娼。妓。此。方。ハ  
鄂。の。皴。く。ち。や。爺。父。さ。う。で。面。白。く。ハ。村。の。さ。ね。あ。ら。い。さ。う。金

ま。出。せ。身。持。を。ま。る。こ。り。方。も。の。り。ま。ら。娼。妓。荒。ハ。ま。ま  
好。男。子。が。持。ぬ。ハ。わ。く。ら。大。金。を。か。し。七。身。持。し。ま。が。あ。ら  
逃。て。も。性。見。て。見。る。と。老。來。の。癪。ふ。彼。様。く。と。笑。ひ。ま。の。り  
悔。し。く。ら。よ。く。内。証。と。安。れ。し。と。ま。ら。持。て。骨。を。折。し。け。ん  
あ。の。好。男。子。白。河。根。町。へ。も。人。と。ま。ら。し。七。客。よ。と。ま。ら。福。見。香  
近。く。娼。妓。が。あ。ら。の。り。さ。ら。製。作。が。お。茶。の。方。ハ。ま。鮮。く。あ。ら。の。り  
ら。う。と。ま。ら。う。り。が。公。の。案。ど。く。世。間。ハ。異。る。もの。と。公。様。の  
美。し。娼。妓。の。物。さ。も。も。根。さ。う。で。他。の。女。房。持。人。も。あ。り

直事をしと孫子の節も花をわひ出た爺いもあつた  
ほせわトのいさぐら。相草くのいさその顔の厚風のうらあめ  
思く程の見えぬどの人のいさ直事音のいさぶあひせんと  
胸のうち燃る火種の頼らさし。顔ハ紅葉うひり時雨睡み  
うらひを密に拭て。ほへま久し別後で来きしうらうら懐くはる  
ませんけほど左様と一言を彼方ハ急流の人ごう女房の成り  
のいとのいさあゆめいりません。根合思ひつらて及ぶな意とやんを  
ゆりまはるる容へ。瘦我勝せんざう左様でもあつたは

「正実さぬも」客「いさよと直事音のいさぶあひせんと  
男情と連てはがさぶらうど。ほへま三左様れば様への  
むりあやうはせんト不傳妓女の景教るまへ他のいさあめ  
情いさ。程合まが男の勤めあつてついでに我もあつて  
小園の揺ひしも。その実情を待らうとのいさ。ほへま連の  
客。あやうけらうら障ふとわけ。ちりともいさ見合と「魂胆  
最中かあうま。今小使の世つらうも。後お見せトのいさあひせ  
け方の客「太助さんま。お遠入ヨ魂胆といさ理だつらあひが











末摘花四編上之巻了

驚くは所不類けき入用万のり万右のりつ騎ひ  
て不自由き。遂にふつけ七はのをよ一巻もぢりせり。  
思ひふけきと末次第への通路へ堅く禁めりしと公  
まじりも今日と暮し。明日と明しと居りけり。

金水平

閑情末摘花第四編卷之中

東都 松亭金水編次

第廿一回

嬉しきりの途へ六地獄て佛とりぬるのつ現ゆ少一の  
先ほめて二個の地獄の客ともるる人ま断を皇天の  
おん汁をひり神佛の護りぬるる清くぬるる清くぬるる  
行遭て今も隙も同もなく。き世ハお里ぬるのののふ  
怪しもらとて死を止まら。想のちちぬるか里が家面も

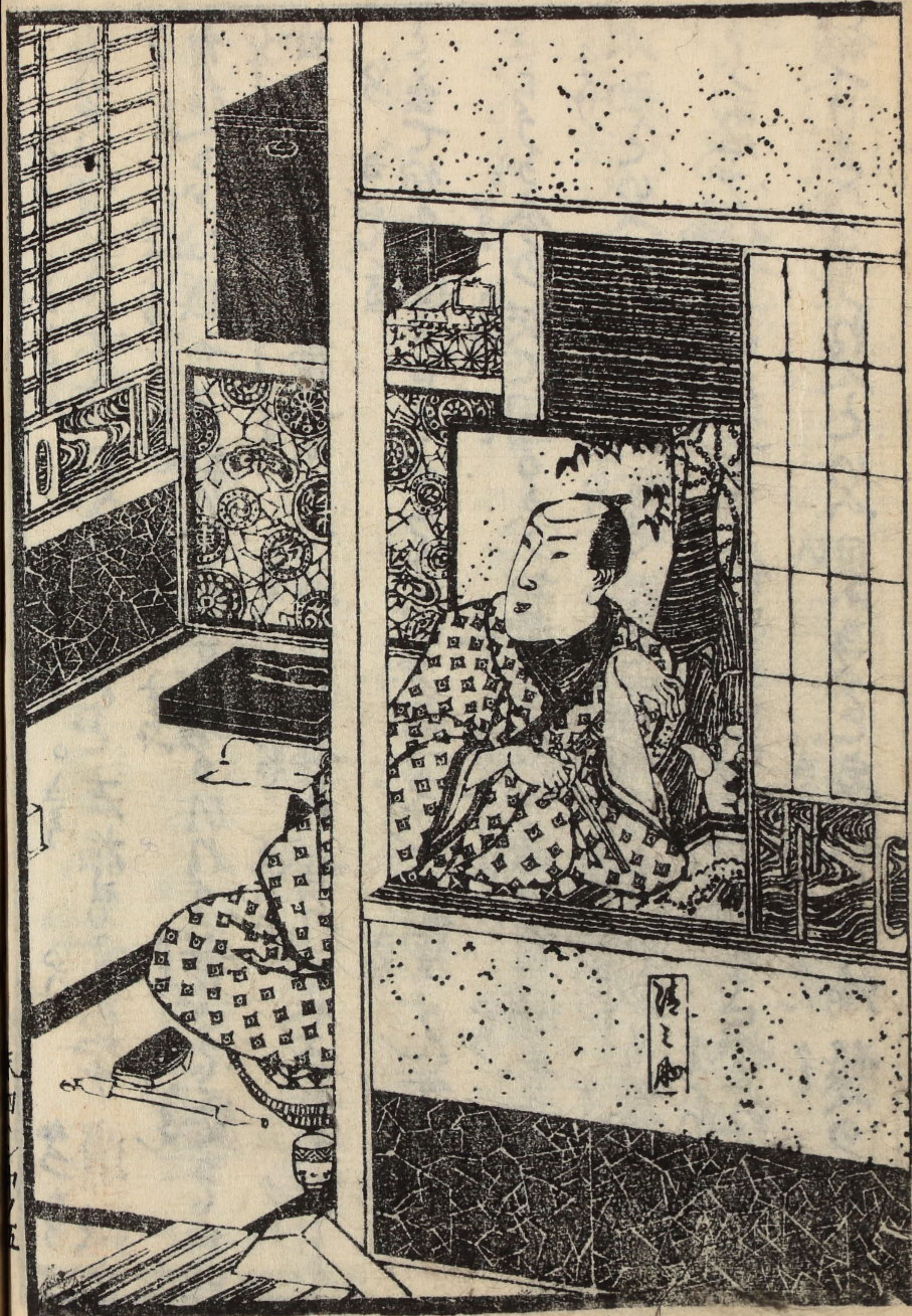




















まのふみ習う 今日の日へまじど奈なる 黄乃吉日 白里母  
ふづ 日果より 食く 中での 仁公 功德 深る 来まると 悲教 輪  
圃の 喜ぶも 悪ゆめり ともる べー

作者 白尾より 米次 希へ 太助を 伴ひて とも 来り 白里

母子 小 対面 して 白尾 とも 一旦 白里を 太助が 家へ 送る

三万 右の ちと 指して 養女 の 盃を させ 夫より 徳納の

次男 信礼 の 目 白 白尾 の り むり とも とも 送る 記 せんハ

く ちと ちと 理る 煩ハ け け け 省て ある け け 省官

の 法 器 直を せ せ 漢 せ はん 工を せ せ

第廿二回

白羽根町の 福見屋へ 今日 新婦入の 準備と せ 胡ま したより

魚市へ 人と せ きて せ 料理の 献立 せ せ 座敷の 掃掃 除床

の 掃掃 せ 蓬菜の 煮物 古例の 蝶花形 千束の 松小世の

竹も せ せ 扇の 扇 せ せ 文幕 せ せ せ せ せ せ せ せ

次第の 衣服と せ せ 入 せ せ 入 せ せ 入 せ せ 入 せ せ

つと 箱 挑 灯 せ せ 準備 せ 持 せ せ 太助 が 方 へ せ せ せ

程もゆき見暮て同毎小灯を燭臺に出逢への桃  
灯と廊の鼻より響く一と米次希が響入より響くを  
相尋小途中まで逢ひ出人と見世の侍居あるひくお音  
出入の人待りまて居る所へ向より来る三四人ごとくと  
見世先へ這入るを見まづ見るまぬ人跡小引き一人の  
女八年まづ二十四あるがその風俗へ似女も今宵の  
新婦とく思ふまに殊小米次希もまづ帰らねば振四の  
来へまかりと人々不審小同と目と見合言次りのも

うつーぶ見小挑灯持する男見世の揚へ腰さうけて  
あるは後輩の者むと人やまが且那の内室さんの侍居れ  
やしてあまを送門てまうやとハイ橋小あま一やと  
言捨たまを侍居る送物と伴ハイのまづいおのひか  
内室さんいまもまづいおのひかませんがモ門遠ひしやまづいおのひか  
るも男と門遠ひしやまづいおのひかやせん福見えよるまづ白  
羽根町ぬ一軒あつまきやね人等が伴一なるむど福見えハ  
る茶をうりハテナ夫もや今夜お約束のお姫はよる

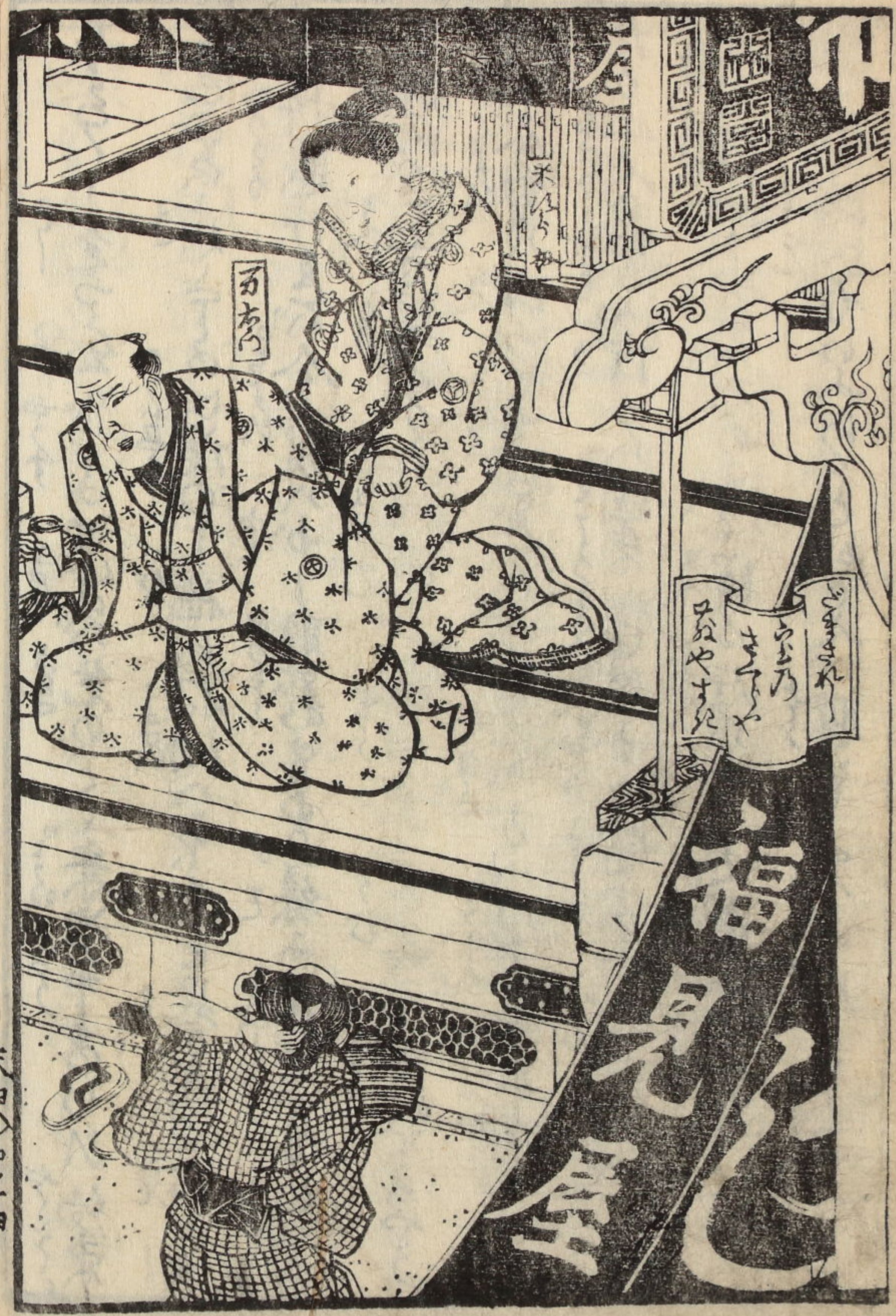


この身共のまゝねが御堂殿のござるの衣人候きり現るり  
 二後三後の早代り。御堂殿の御前候下し。一ト救  
 う。梅のたくら。桂のまき。生協とて。まよ見命。て。何と言  
 出は。もの。御前。伴取も。まよ見命。も。御前。候下し。まよ見命。  
 伴取へ。近入。て。見直。す。母親。と。方。右。の。ハ。お。記。の。ま。の。や。酒。め。く。  
 ませ。居。る。む。ま。ま。如。此。の。よ。ま。の。ハ。万。石。の。入。田。に。ま。の。表。の。ま。の。表。  
 白眼。つ。け。万。石。の。入。田。に。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。  
 今宵の祝宴と附は。物寤後。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。

自らが撮り出して仕置り。ト付を。張。て。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。  
 かの。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。  
 老も。角も。男。が。二。人。附。て。居。ま。る。左。根。自。由。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。  
 云。理。ゆ。こ。や。さ。る。ら。先。ハ。儀。俸。の。し。七。喧。嘩。仕。り。け。今。坂。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。  
 きて。彼。是。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。  
 降。り。ま。して。米。次。率。の。の。圓。世。法。で。ゆ。ね。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。  
 志。す。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。  
 せ。い。ま。ま。せ。り。却。て。男。が。出。ま。す。と。直。由。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。の。ま。の。表。

方が左様の入る。ちよとクも角もいざ。全体は松の幼木と一  
たう。その女の逢を聞て見交すま。米次希も陰を松とて来  
やうとの入女の逢を隠して並て他の女とわづらうと女房の仕  
松とて密がりの。夫も自己一分で海より。今夜の娘は仮初まら  
る万右衛門が巻ひ女先のみ親も叔もりの。吾侪が自由ゆ  
まらねて安んず。夫とて悲しくわづらて居るが。ササ持もね下宿  
怒り。守ても付はぬ威勢を言ひ。母親はまることを看めるとい  
法でも分解と。E. 娘が落りて入太助の長足も海にいと見世へ

ちよとく。さういふお容よとゆが先のどく。米次希ありの幼木。  
まよゆま。米よりの口渡の。他は仔細のゆいを見の。何れは  
ても折悪けま。今宵へか。取巻もりの。妹は米次希も苗の  
と。屏のの上の鳥くると相談しては。方より。云の。ゆはを。あやう  
程。今宵へ帰る。て。ゆは。と。い。ど。彼。方。ハ。海。公。廿。八。送。ち。来  
たる。二人の男が。帰る。人。固。果。當。然。女。ハ。當。家。の。娘。な。れ。ば。一。旦  
桐。と。透。り。さ。う。い。ふ。其。の。ま。帰。る。理。か。と。と。救。め。方。配。り。今。宵。の  
容。よ。と。海。を。り。め。と。お。い。ハ。腹。も。ら。う。と。川。の。い。ち。ち。裁。ま



母親をのいひたるも教まぬまで猶彼星とうちらひ時刻を  
伸ます内の真の新婦の来るべし然して見ます入らぬ  
袖を吾ら見るとる理まが今宵の角も角も満して返き  
み如からと社を赫と胸とさすとていづれも後の悪き  
やうめにせぬやが今宵の肝の主も當りまるく帰りて相  
談す聖ののめどもある下にますといふも可ぬ伴頭面男全夫  
でお茶さんの方ハ眞者もいまさらうがお方のままして六  
まど迷惑らうまらずを縁とらせども困窮の中への女と

美しきまんまば胡夕の薪費も多く堂家の且那りか持と  
やでまるけしお方で禰ろうも同様で扱くを死で身まるぬ  
まが角も角もの婦人のままとて深うませう下り尾の分を  
一人の儀ようアまさく切と幾度言ひても見えぬといふはあらまり  
ままらうたと津根がいと言ひまるても他の女房を俗時まる禰  
ろうでまるぬとまのりあらず入らぬねてお方といふまるまると  
お方の顔を見ていといふお方ハあらずの女が米次弟の  
別後で女房の約束があるらう連て来るこのいふまらずち女房







願と連てまゝに所で赤をと圖とまじうして思ひつゝもて親  
 身の氣情でまゝをさすも思ひまゝに思ひの氣の親の親の  
 如く叔の如くは後りもさふ難用まををりて返して思ひも  
 何を波風なく納め度と仕るもまじう考げ合ふ  
 左根其くも程りストも消え畢るぬ桃灯二張先の立中ぞ  
 一色行舞の迄の太助が裏山細麻の上下製ぐことの聲  
 先(來りり) **包本平**  
 末摘花四編卷之中了

閑情末摘花第四編卷之下

東都 松亭金水編次

第廿三回

再洗太助の衣物の戸をもち披きそ餘くと内より花娘が  
 その粒の及風俗の花の柳ふとさよふを被る雪の綿帽も  
 後様とる先へさきと末摘花の色月の色もさきとさきと打  
 捨袋ある美女の姿をさきとさきと入るまが休息と傍の  
 納戸へ入るそ太助の姿を母と万右衛門へ今宵の祝をさきと



大いけの 万をばつて顔をもたてを低くして太助の  
 對ひ 万一 こそ近曾お婿入對一のい 沢もさのいのか出来まして下  
 圍て太助の不審顔 女一 言解のさのいりへい 万をばつて顔  
 澄むらうり 万一 やサ 裁決所いもりの子 纏み中廿六 今宵の祝  
 言の免の通り 準備して 既にお婿も お里を連れてお出で  
 めるけいどと益いへい ちかんとてませぬ 本五 ちかんとてお婿のい 沢  
 万一 新いもさうりの 澤イヤハヤ 大妻 太一 けいりもさうり 大  
 妻のいりいと 婿入の再 田宅へ 澤いぬ ちかんとて 門火 燈花を

物まも 脊向の 物まも 万をばつて顔をもたてを低くして太助の  
 左格 思ひ 万をばつて顔をもたてを低くして太助の  
 入 万をばつて顔をもたてを低くして太助の  
 万をばつて顔をもたてを低くして太助の

「さういふおせんトのくは他でもない。米次郎の阿房が遠慮が  
り不持子も吾もたやんまて切て明日は口が塞がさせんト彼  
清徳が一任一任と頼てる。は身を働かす。さうして太助  
さん、おうちもねんがて面月次郎もさういふおんが思ひもさ  
らぬ今の平合さうせ給て彼と阿房のあつて他の  
大切な女児と其の割へ吾が養女や七。娘と祖や孫女が  
婚まつて見まづお茶へ對し親家さへもいふ後む。勿論  
以茶さう米次郎とお里どのへ情合してさういふおんが思ひも

のけいさどさやア互のねづいで吾あつた所もさういふ  
ミラ見まづ今回の一件とわづらひて婚れさせや人の女児は  
癖をつけ給へぬ。おふす。同業も私もおんが思ひの  
面水性や。さうさうくうと居るをわらうが吾もさう。偏重  
のりて木は木竹は竹とあやうも其の後ね人同物もさういふ  
さやういふおんが。まが今晚の婚れのお断りさういふ  
跡で彼もが相對づいでさういふおんが思ひもさういふ  
勝ふおんが官が。おふさや不美が。養母も米次郎も

左振もつゆあつと苦切なる顔をあけく採りて太  
助ハ早急ト大下百草をえん本も又そのおふもつて美の  
不業おまのと増もねえもうらむと女ヶ接込さうと海小回  
美がのらうものハ斜路ハ喜ぶでもねえが夫も多お茶の  
身道はなうねどもが迷案のやア成りも様ひさうね  
のらっしサ強うととおびる廿八お里ハ松ヶ怪どけとどお茶の  
養女小集つこらのや。是も是ハお茶の女児とたると米  
次布どのふとも不念もわらう不持ものさお里ハ何の終

のりて疾ものふたうしものつ。五ハ五瑕物とらるが疾もの  
増れとまをいとう入で着彼道がのりて見まハ疵物ハ七返すの  
るはまもさうらう疵物ふりねえお茶の被浴ハしもう。本ハお茶  
でも疵がつく。いふ入益ハあてもあね入でも。細末お茶のやア  
何所へ出ても天下晴ての支那おねえサアも所ハしうで  
どうなるか。五ハ五大夫支那の屋治とまもアお茶ののり通つて支  
るは改めて今晚は今懸係ハあまませう。大ハ左振のまも  
涙もまもが。お里の身ハハ何後ハ七下さるる。五ハ五お茶

ごうて。一。先のりませ。ナニねが。傍の  
方の傍の。決り。縁せし。先のりませ。ナニねが。傍の  
もの。太一。こぼる。ま。万右の。まんの。お。でも。あ。後。父。縁に  
合。もの。縁。もので。途。方。い。り。け。と。ま。縁。て。養。女。養  
父。と。似。あ。も。父。子。の。縁。と。組。で。ま。ま。も。ま。ま。の。久。百一  
い。こ。り。サ。い。ト。冷。笑。ふ。當。下。の。太。助。の。い。り。く。面。を  
ま。う。折。目。さ。る。上。下。の。肩。支。井。と。り。掛。の。太。一。を。い  
ん。ま。法。の。い。美。江。治。ど。ア。時。が。明。ね。入。今。ま。う。は。極。み。の  
言。と。ち。や。ア。お。里。が。親。へ。自。己。が。接。ね。入。その。云。沢。め。や。ア。縁

父が。あ。あ。面。で。い。ま。い。り。で。や。う。め。や。ア。ま。ね。ト。養。を。堅。め。て  
ま。あ。る。折。り。納。戸。と。花。を。お。里。太。助。が。後。と。あ。り。う。と  
抱。め。ア。サ。叔。さん。ま。ま。ア。極。み。ま。う。く。後。で。お。里。を  
ま。の。太。一。邪。魔。の。ま。所。故。せ。ま。い。イ。や。放。し。ま。せ。ん。ア。下。の。め。を  
松。が。い。り。を。圓。々。か。笑。こ。る。わ。ど。お。里。の。お。り。の。も。む。さ。る  
縁。さん。お。里。の。い。り。の。も。も。決。定。ま。ん。と。縁。と。組。を。見。ぬ。も  
ま。ま。の。縁。が。切。れ。て。見。ま。ぬ。見。ぬ。ま。る。縁。も。ま。い。り。の。い。り  
い。り。ま。い。り。の。い。り。両。方。ま。い。り。の。い。り。ま。い。り。の。い。り。ま。い。り











...  
の祝儀のその女中が折悪く落合て。夫たらうと彼もきこ  
運とそ米次第きるの以劫爰と更にねがゆわぶふ。お佐とよを  
やと老。お安入るのあまのふ。夫の詮方もごまかすせんが。おの  
身小きうまて良人のくさうそのまの残ごまうと此お家か  
継ごまきう。ねも得くぬお返一もまじりて下すまうと。  
さく候爰か。の信成ゆらつて。安とまうと。ありのをまう。  
とるやうもせぬ一應のむらし。おまじり大いなるはちひ。

米四八...

米次第の縁組。叔まんがやせんぬ。その女児とねが思ふ  
するのぶら良人を出して。あゝ思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。  
て。あゝ思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。  
持て。あゝ思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。思ひて。  
か。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。  
入る。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。  
ゆと。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。お佐とよ。

第廿四回

米次第の馬も。幼當の身とあり。さうして。人さき方も  
 なく。まづ。他の。人さき。か。里。が。母。と。妹。と。は。は。い。は。い。は。い。  
 委しく。得。ま。い。へ。ん。と。い。ふ。一。向。の。目。も。久。し。く。あ。の。く。目。も。  
 見。合。を。な。り。何。れ。し。林。の。う。り。の。佛。の。界。の。あ。い。な。い。も。年。末。  
 貝。須。の。え。ん。も。ま。ま。を。あ。い。ん。あ。い。ん。も。同。も。あ。い。ん。  
 大。愛。の。あ。い。ん。も。あ。い。ん。も。あ。い。ん。も。あ。い。ん。も。あ。い。ん。も。  
 母。の。あ。い。ん。も。米。次。第。が。あ。い。ん。も。あ。い。ん。も。あ。い。ん。も。あ。い。ん。も。  
 中。の。あ。い。ん。も。文。一。通。の。あ。い。ん。も。あ。い。ん。も。あ。い。ん。も。あ。い。ん。も。

長。終。り。一。丁。も。不。測。な。と。い。ふ。ま。は。米。次。第。の。今。の  
 お。勤。し。七。始。り。と。い。ふ。娘。の。う。り。の。清。鶴。の。在。作。の。三。浦。を  
 て。い。づ。い。ま。せ。ん。と。い。ふ。と。同。い。な。い。け。方。も。あ。い。ん。あ。い。ん。あ。い。ん。  
 う。ち。採。り。て。米。一。斗。三。浦。の。あ。い。ん。清。鶴。の。あ。い。ん。あ。い。ん。  
 う。り。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。  
 母。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。  
 一旦。米。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。  
 一。斗。三。浦。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。あ。い。ん。の。

工吏をとりて双方官署にふるむ様子の胸裏用ひて  
遠の形をかゝるべし其れに就て扱はるる様子を  
官多あつたが。お里を留てあつた所はさう脈がわらうと  
思ふのサト圓ておみまへて是れを  
お母さんの思ふやうにえお夜帳を中て見まへて扱ひさんが依  
持死うら死つことりあつてもういふ末に丸田の早もたれ  
目もさす所は且那その三浦公の清鶴と申す所の娘お里が  
始に扱ひてあつたはあつた文を紙とて書出たはあつた

其の文存をさす所がわらうとも官署の直の廊へあつた  
何れ減らある身徳をさす所の縁のまうその姓を  
さすません。お里と偶々案ど居るもさう文を紙とて  
まう浅草の待乳山茶屋に元形より薬卜者の宅へ  
あつた顔けいさすそのに居る所のりゆあつた  
逢ふと存ど居る処へさすのにお出でお里が身元のあつた  
まうさす所の督修准後とまうかきまう捨あつたはさす  
まう抱と思ふ人の通つまう終まてまう待乳山へあつた



遠くまで受て捨る色と一國の恨を晴し  
あつゝの但し黄金のせんとその悪巧の國を  
中も角ゆもその公根を擡て後小樹もあつとま  
世は清く助と密なまねをかくとこの樹汁を  
文面家の主の元務を昼夜も地内へ生を  
宅の居る女房の針線の下へ通るおよう  
陣のて来る日中一人て居るゆゑの  
あそふまゝのりる望日中のうらみ  
計らふべし

本四下下

其後休むつ明目よりけしき  
物その路より米次希ハ腹中眉深小待乳山さ  
形ともあつと清鶴の思ひの身の高や  
女子の常史輝の頼ふ出さるひて  
と母一その折る表の方の女の  
てまはる清鶴が藤子の透るさ  
さつと今更ハナイ折るア  
まゝ今更ハお着をばつと  
今更ハお着をばつと



未四下之四









伊勢熊

海にゆく一巻二巻とて成りては世に知らぬ人の世に知らぬ人の

法務が身の上の事なる涙とて切なる法に助かるとして

世とていそせんとていそせんとては世に知らぬ人の世に知らぬ人の

言さるるも山山ものごとくしてやせとては世に知らぬ人の世に知らぬ人の

の長けはとていそせんとていそせんとては世に知らぬ人の世に知らぬ人の

作者は法務が所なる人なる万石なるが豊中の汁兼者官

より一握量のもは五編の至て詳なり大団圓なる人の

末摘花四編巻之下了

金本村

